

☒ 話すこと ☐ 書くこと☒ 個に応じた教材の作成や指導の充実
☒ パフォーマンステストでの活用☒ 授業での活用
☒ 課外活動での活用☒ 家庭学習での活用実践の
ポイント

AIの個別練習と教師の授業設計を組み合わせた、生徒の自信と話す力を育む環境作り

実証概要

<校数> 2校(中学校:2校) <人数> 277名(中学校:277名)
<学年> 中学校:第1、2、3学年 <アプリ等> ELSA for schools (株式会社 ELSA JAPAN)
<AI機能について> 音素レベルの分析とAIによる音読指導で、スピーキング・リスニング力を向上。安全なAI対話やCEFR準拠の精緻なフィードバックにより、実践的な対話力も養える。また学習データの可視化により、教師は生徒の課題を的確に把握し、効果的な授業や進捗管理に活用可能である。

AIの効果的な活用方法や取り組み (AI英語モデル校事業)

●AIアプリ活用による「練習機会の保障」がもたらす変化～英語発信への意欲向上へ～

日常的なAI活用は、生徒の発話への自信を育み、Susaki English Oratorical Contestへの積極的な挑戦を促した。出場者はAIで反復練習を重ね、流暢さを向上させている。結果として上位入賞者が県大会進出を果たすなど、AIによる練習機会の保障が、生徒の意欲と実績向上に大きく寄与した。



●AIの即時性と教師の価値づけ:個別最適な学びと表現力を育む授業デザイン

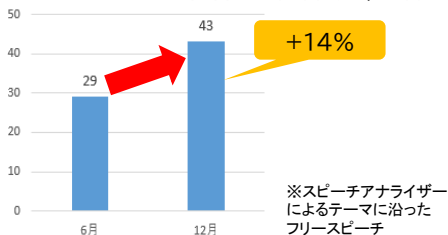
AIと教師の役割を分担した新たな授業スタイルを構築した。AIは即時フィードバックによる知識の定着と学習サイクルの高速化を実現し、生徒の心理的ハードルや学習上の孤独感を軽減する一方で、AIの厳しい評価が自信喪失に繋がる課題に対し、教師が評価を再定義する「翻訳者」となり、目的意識を支える役割を果たした。単元ゴールを見据えた授業デザインを通じ、両者のベストミックスを図ることで、生徒の表現の幅を広げる実践を実現した。



実践成果の検証結果 (AI英語モデル校事業)

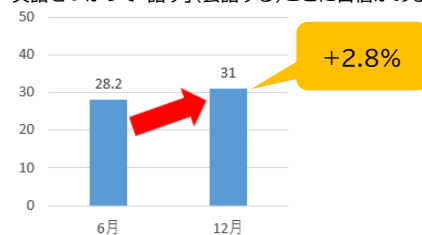
①児童生徒の英語力の変化

CEFR A1レベルの割合の変化(中学2、3年)



②児童生徒の関心・意欲の変化

英語をつかって「話す」(会話する)ことに自信がある。



③教師の指導の変化

○AIを用いたことにより、授業中における児童生徒の英語による発話量・発話時間はどう変化したと思う。

○AI活用により、パフォーマンス評価をより頻繁に行えるようになった。

○家庭学習でAIを使用した場合、授業内容と家庭学習の内容を連動させるために工夫した。

※上記の3項目で肯定的な回答が大半を占めた。

AI英語活用リーダーの育成や普及に関する取り組み (AI英語活用リーダー事業)

●全英語教員が「改革の旗振り役」に！AIで進化する英語教育

市全体の英語力底上げとAI活用の統一を図るため、モデル校以外も含む全英語教員を「AI英語活用リーダー」に任命した(モデル校以外は市費でAIアプリ導入済)。その結果、教員間でAIアプリ活用や授業構成の教材研究が活発化。各校1名という教員環境でも、勉強会で不安や疑問を共有・解消できたことが、その後の効果的な活用に繋がった。



事業全体を通じた成果や課題、今後の取り組み (AI英語モデル校事業・AI英語活用リーダー事業)

AIに反復練習や評価を委ね、教師が設計と個別指導に専念する「ベストミックス」の構築により、指導の充実度が増した。今後の課題は、AIを単なる道具にせず、単元目標の達成に向け効果的に組み込む**授業デザイン力**である。教師には、AIとの学びを対人コミュニケーションへ繋げ「**生きた学び**」へと循環させる働きかけが求められる。

今後はより高度な授業設計や中間評価の質を追求し、生徒が「**習得した内容を他者に伝えたい**」と思える、意欲的なアウトプットの場を創出することが重要となる。